

マンメド・アミン・ラスルザーデ著 改訳 『あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想』(その1)

著者名(日)	徳増 克己
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	10
ページ	179-188
発行年	2010-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000077/

マンメド・アミン・ラスルザーデ著

改訳 『あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想』(その1)

徳 増 克 己

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷

第10巻 2010年3月

マンメド・アミン・ラスルザーデ著 改訳 『あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想』(その1)

A New Translation of Məmməd Əmin Rəsulzadə's A Turk Nationalist's Memoirs on Stalin and the Revolution, Part 1

徳増 克己
文化政策学部国際文化学科

Katsumi TOKUMASU
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

以下に紹介するのは、20世紀前半のアゼルバイジャンを代表する民族運動の指導者マンメド・アミン・ラスルザーデ(1884-1955)の晩年の著作『あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想』の冒頭部分の翻訳である。この回顧録は、もともと1954年にトルコの新聞《デュンヤ》紙に連載された。著者ラスルザーデは、20世紀の初めからロシア帝国内の産業都市バクーで政治活動に入り、その中で労働運動の組織化に携わっていたボリシェヴィキの活動家スターリンとも接触をもつようになった。彼はアゼルバイジャンのみならず、イランやオスマン帝国(とトルコ共和国)さらにはヨーロッパでも幅広い活動に従事したが、今回はまず、スターリンとの出会いにいたるまでを扱った、回顧録の冒頭部分を訳出した。

The following article is the first part of a translation of *A Turk Nationalist's Memoirs on Stalin and the Revolution*, written by a famous leading Azerbaijani nationalist Məmməd Əmin Rəsulzadə (1884-1955). The original text of the memoirs was once serialized in a Turkish newspaper *Dünya* in 1954. The author Rəsulzadə began to engage in political activities at the beginning of the 20th century in his hometown Baku, which was a booming industrial city under the Tsarist regime at the time. Meanwhile he came into contact with a Bolshevik political activist Stalin, then known as Koba, who had tried to get the support of oil workers in Baku. In fact Rəsulzadə's political career is not confined to activities in Baku and Caucasian Azerbaijan. Rather afterwards he also engaged in broad activities in Iran, the Ottoman Empire (and Turkish Republic) and Europe. Though these activities may be very interesting, for the present I translate the outset of the memoirs, which refers to his first contact with Stalin.

はじめに

以下に紹介するのは、ロシア革命後にカフカース(コーカサス)東部に成立したアゼルバイジャン民主共和国(1918~1920)において国家元首として重責を担ったマンメド・アミン・ラスルザーデの回顧録『あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想』を訳出したものである。この回顧録は1954年5月22日よりトルコの新聞《デュンヤ》(世界)紙に連載されたものであり、著者の広範囲にわたる活動の軌跡を反映して興味深い情報を含むものとなっている。⁽¹⁾

以下の訳文は、かつて「M.Ä. ラスルザーデ「スターリンと革命の回想?」」として同人誌『トルコ文化研究』第8号(平成4年)に掲載した小訳を全面的に改訳したものである。旧訳は、当時オリジナルのテキストが入手できていなかったために、アゼルバイジャン共和国の首都バクーで刊行されたアゼルバイジャン語訳を底本とした重訳であった。⁽²⁾その後、《デュンヤ》紙に掲載されたオリジナルのテキストが入手できたため、このたび全面的な改訳を施し、旧訳では未完のままであった訳文の完成へ向けて、ひとまず冒頭部を公表する次第である。

なお、《デュンヤ》紙には連載開始に先立っ

て原著者ラスルザーデに関する紹介記事が掲載されているので、回想録本体の訳文の前に、この記事も訳出しておいた。

=====
《デュンヤ》紙、1954年5月21日金曜日(第3年、802号)

人物像

あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想の著者 M. アミン・ラスルザーデとは何者か。

明日以降、本紙第4面にて[読者諸賢が]その興味深い回想録を読まれることになるマンメド・アミン・ラスルザーデは、1917年と1919年にバクーで招集された党大会において、カフカース(コーカサス)におけるアゼルバイジャン共和国の形成と民族解放運動において歴史的な役割を担った民族アゼルバイジャン《ミュサヴァト(平等)》人民党の党首に、全会一致で選出された。

[ラスルザーデは]1918年5月28日に共和国の独立を宣言したアゼルバイジャン国民評議会の議長であった。国外にあってはアゼルバイジャン民族運動を何年にもわたって代表してきたアゼルバイジャン国民センターの

所長職を務めた。

ムスリム世界の著名な著述家であるラスルザーデは、1905～1908年にバクーで発行されていた[アゼルバイジャン・]トルコ語新聞諸紙上で活躍し、1915～1917年には再びバクーで有名な《アチュグ・ソズ(率直な言葉)》紙⁽³⁾を創刊・発行した。1908～1911年にはテヘランで、イラン初のヨーロッパ方式の日刊紙《イーラーネ・ノウ(新イラン)》紙⁽⁴⁾の主筆と編集長を務めた。(この点に関しては、E. G. Browne, *Literary History of Persia*, London を参照のこと。)イスタンブルで出されたさまざまなトルコ語の新聞や雑誌(特に《テュルク・ユルドゥ(母国トルコ)》誌)で活動し、1923年から1929年まではイスタンブルで発行されたアゼルバイジャンの諸雑誌の運営にあたった。⁽⁵⁾

カフカースの人々によく知られた政治家[ラスルザーデ]は、ザカフカース・セイム(1918年)においてはムスリム党派を率いた。ザカフカース政府が、1918年にトラブゾんに、後にはバトゥーム[バトゥーミ]に、当時のトルコ代表らとの協議のために派遣した代表団に加わった。

1884年にバクーで生まれたマンメド・アミン・ラスルザーデはまだ若かった時分に政治活動に身を投じ、1903～1904年以降ツァーリ体制に抗するさまざまな秘密の活動に加わった。自らによって代表されるアゼルバイジャン人の青年革命家サークル⁽⁶⁾を率いた。このころ、地下活動の最中でスターリンと接触を持ち、兩人の間には良好な関係が築かれた。

1908～10年にはイランにおける立憲運動に奔走し、その地でイラン・デモクラート党の中央委員会に加わり、この党のイデオロギーを同党の指導者セイエド・ハサン・タギーザーデ(イラン上院議長)とともに練り上げた。

1910年には影響力を強めつつあったツァーリ政府の公使館の要求と圧力のために、イランを去ってイスタンブルへやって来た。この地でトルコの政治結社、とりわけ《トル

コ人の炉辺》のメンバーとともに活動した。同時に、この地からバクーで組織されつつあったアゼルバイジャンの地下活動との連絡を続け、1911年にはミュサヴァト党の結成を促した。

1913年にはロマノフ朝治世300周年記念に関連して布告された恩赦を存分に利用してバクーに戻り、そこで出版活動を開始するとともに、《ミュサヴァト》党の非合法活動や半ば非合法の極めて多数の組織や結社の活動にも影響を及ぼした。

1915年には、第1次世界大戦のさなかにバクーの軍政長官により収監されたが、1917年には軍法会議にかけられようとしていた矢先にロシアで勃発した革命のおかげで放免された。

1917年には、民族アゼルバイジャン《ミュサヴァト》人民党統一大会と同年バクーで開催されたカフカース・ムスリム大会の場で、カフカースとアゼルバイジャンがロシアから分離して自治的で独立的になるというテーゼを擁護した。同年5月10日にモスクワで開催された[全]ロシア・ムスリム大会の場で、ロシアが複数の民族国家に分かれることを求める決議案を採択させた。⁽⁷⁾

その後ティフリシ[トビリシ]で開催されたザカフカース・セイムにおいてはカフカースのロシアからの分離を要求し、この要求は1918年2月に採択された。

1918年5月26日にはザカフカース[連邦]が解体したため、アゼルバイジャン民族評議会は1918年5月28日にアゼルバイジャン共和国の独立を宣言し、この評議会の議長の任にあったM.ラスルザーデはオスマン政府との条約に調印した。この条約にしたがってトルコ軍はポリシェヴィキの占領下にあったバクーの解放のため、アゼルバイジャンの武装勢力を支援した。

[アゼルバイジャン民主]共和国のロシア・ポリシェヴィキによる占領に際して(1920年4月27日)、M.Ө.ラスルザーデは収監される。収監中にスターリンが彼のもとを訪れる。結局、[ラスルザーデは]モスクワへ連れ

ていかれ、そこで2年間軟禁状態におかれる。1922年にフィンランド湾方面から脱出してヨーロッパへ出ると、そこからイスタンブルへ来て、出版と政治活動を続ける。

[彼は] 定期刊行物および不定期の刊行物を通じて、ポリシェヴィキの政策、とくに共産主義者たちの東方政策を暴露する。ソヴェトの策謀と外交過程の結果、イスタンブル退去を余儀なくされると、彼は自らの活動をヨーロッパに移した。この地では、《プロメテウス》協会(ロシアの被抑圧諸民族の統一戦線)と(1934年にカフカース連合協約に調印した)カフカース諸民族同盟の場で活動する。ロシアの被抑圧諸民族の共同機関誌としてパリでフランス語により発行されていた《プロメテウス》誌に定期的に論文を掲載する(1928～1939年)⁽⁸⁾

彼は4年間暮らしたワルシャワで第2次世界大戦に遭遇する。ポーランド人の友人たちとともにブカレストへ赴く。ドイツがソヴェト・ロシアと始めた戦争に際し、ドイツ外務省の代表フォン・シューレンベルク(のちにヒトラーに対する暗殺計画事件への関与のために殺害される)の招聘により1942年にはカフカース人の他の諸民族の代表らとともにベルリンへ赴く。カフカースの、とりわけアゼルバイジャン共和国の運命に関して交渉に取りかかったが、ナチが諸民族が望むことを理解する能力を欠くこと、ドイツ政府がアゼルバイジャン人民の諸権利を認める気がなく民族解放運動の必要性に敬意を表していないことを確信すると、自らのドイツの政策に関する否定的な見解を1943年8月5日付の覚書で表明して、ベルリンを去りブカレストへ戻る。

1944年にポリシェヴィキがブカレストに接近すると、諸般の事情により彼自身は西欧に引き返すことを強いられる。スイスに行くためのビザ取得の見込みが得られなかったため、スイス国境に近いフライブルク・イム・ブライスガウ市に赴く。1944年10月にはこの都市になされた恐ろしい空襲のおかげで、彼自身は中部ドイツへ避難せざるを得なくなる。1945年4月24日には、アメリカ占領地域にいる。結局、1947年9月にはトルコに來ることができ、その時以來アンカラで暮

らしている。トルコ百科事典[の編集の場]で働いている。1951年にはトルコ共和国国民教育出版局から『アゼルバイジャンの詩人ニザーミー』という表題で代表的な著作が出版された。ソヴェト・ロシアおよびアゼルバイジャンの問題に関する彼の手による様々な論文や小冊子が出版されている。[ラスルザーデは] 共産主義に抗してカフカースの大義のために不断の闘争を続けている。

=====
《デュンヤ》紙、1954年5月22日土曜日(第3年、803号)

あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想

[連載] 第1回

スターリンの訃報記事を書いた人物のひとり、その記事を「途方もない人物の途方もないキャリアが終わった。73年前、[グルジアの都市]ゴリの貧しい靴職人の家庭に生まれた男の子は、クレムリンにて世界最大の帝国の最大の独裁者として死んだ。」と書き出している。

実際、人類が経験してきた全世界の歴史においてヨシフ・ヴィサリオノヴィチ・ジュガシヴィリすなわちスターリン以上の絶対的な支配者はいなかった。相当程度まで彼個人の働きによって確立されたソヴェト体制よりも全体主義的な体制は世界に存在したことがなかった。

我々の時代の歴史を書く人びとは、この史上最大の圧制者について様々な宣告を下し、彼の神格化された人格を様々な角度から分析するであろう。しかし、我々は彼を総体として研究するつもりはない。ロシアの最も恐るべきツァーリたちにも恵まれなかった権力を以て、30年近くもの間、ソヴェト国内の2億人の運命を支配し、地球の3分の1を統制下におき、あらゆる宗教を否定する共産主義という宗教の預言者と目されている、全体主義のなかの全体主義体制の最大の代表者スターリンを、また、彼がいかなるデマゴグで外交官で独裁者であり、いかなるテロリス

トで革命家で元帥で大元帥であり、ファラオやネロやチンギス〔・カン〕たちを後悔せしめる暴君で赤いツァーリであったかを、自由諸国民の社会で知らない者はいない。我々は知られている事柄を繰り返すつもりはない。

1905年と1917年にロシアの諸条件の内に出現した社会主義の諸潮流に属する革命家たちの間では冴えない人物であって、さほど重くみられてはいなかったスターリンのミイラ化した遺骸は、今、マルクス以降共産主義の第2の預言者レーニンのミイラ化した遺骸のそばに横たわっている。

レーニン主義はマルクス主義の一解釈として現れたものであった。スターリン主義はこの両者を完成した体系である。ヒトラーの国民社会主義の定式をひっくり返して社会国民主義の形態に置いたスターリン主義をよく理解できるためには、スターリンの途方もない個性を正しく理解することが必要である。これを行ないするには、歴史家たちがスターリンについて書かれた回想録、語られた印象や説明された観察を資料として吟味することが必要となろう。

スターリン主義という怪物の特徴的な輪郭をその真相に近い形で描きうるためには、各人が自分で見て理解した「スターリン」像が比較されることが大いに有益であることは、疑いをいれない。

同じ時代に同じ条件のなかで同じ世代に属して生き、様々な時に様々な条件下でスターリンとあれやこれやの形で接触する経験を持ったひとりの人間という立場から、我が回想録の彼にまつわる部分を公刊することを決意した。ツァーリ体制に対する闘争、ソヴェトによる侵略と捕縛、モスクワへの道中、モスクワでの2年間およびモスクワからの逃走といった一節を含むこの回想録が同時代の歴史家たちの仕事に役立つとすれば、費やされた労力が無駄になることはあるまいと確信している。

いろいろな提案をいただいていたが、この回想録はスターリンの存命中には公刊しなかつた。というのも客観的に語られることになる諸々の事件の一部が、ある観点からは、誤った解釈に余地を与え得たからである。今ではこうした可能性も消えてしまい、ス

ターリンはもはや歴史に溶けこんでしまった。

- 1 -

半世紀前のロシア帝政に対する闘争

カフカースの一部を成している私の国アゼルバイジャンがロシア帝国に征服されてから100年近い時間が経過していた。この間に我々のあらゆる民族的な基盤を解体する政策を推進してきたロシア帝政は、その目的を十分に達成してはいなかった。民族的特性を片時も忘れなかった我が人民にあっては、自由と民族独立の思想を身につけた新しい開明的な世代が育っていた。この世代は自らが属している民衆に対して、自らが利用できる様々な手段を以て貢献することを望んでいた。

1903年に極東で歴史的な事件が発生した。⁽⁹⁾ヨーロッパ文明に適應した日本が、対馬付近の公海上ではるばるバルト海を飛ってやってきた大ロシア帝国の艦隊を一撃で海底に沈めた。それから、ポート・アーサー〔旅順〕の攻略と相次ぐ日本の勝利が到来した。

全世界、とりわけ近東と親しくロシアを震撼させたこの出来事は帝政の数世紀を経た屋台骨を揺るがせた。ロシア国内の自由主義分子や革命分子が動きだした。これらの人びとはツァーリ体制に満足していない人民大衆を革命化するために自分にできることは惜しまなかつた。こうした目的で、至るところで自由と民主主義の思想の普及をはかる組織が設立された。

帝政に抗して闘っている政治集団や諸階級は、帝国を構成している諸民族、諸集団や諸階級のようにあらゆる種類の色彩や調子を帯びた幾多の党派に分かれていた。しかし、全ての反対党や革命政党および同様の集団は、共通する分割線により2つの戦線に分けることができた。このうちの一方の部分は、ロシアにおける議会政治の確立で満足し、専制的なツァーリズム体制の代わりに立憲君主制の樹立を望んでいた。これらが自由主義ブルジョア諸政党であった。急進的民主主義者と社会主義者が第2の部分の構成していた。これらの人びとは帝政の打倒と、それに替わる民主的な共和制の樹立を追求していた。同時

に、政治革命では満足しない、このグループに含まれる社会主義諸政党は、ヨーロッパの資本主義とは異なった社会改革の綱領の適用を必須とみていた。

[さらに] 社会主義諸政党は、観念論的ナロードニキ・イデオロギーの社会革命党員(略称エスエル)らと、史的唯物論イデオロギーを奉ずる社会民主[労働]党(略称エスデー)の諸集団とに分かれていた。

ポリシェヴィキとメンシェヴィキの抗争

社会民主党員たちは有名なロンドン大会(1903年)で2つに分裂した。⁽¹⁰⁾その一派がレーニンの指導するポリシェヴィキ派を、他の一派がマルトフの指導するメンシェヴィキ派を代表していた。(続く)

=====

《デュンヤ》紙、1954年5月23日曜日
(第3年、804号)

ある日バクーでスターリンが我々に会いたがっている」と知らされた

[連載] 第2回

その当時、カフカースは帝政の行政機構の枠内において総督領の形態で統治されていた。たいていは帝室に属している皇族により統治されていたカフカースの行政と知的活動の中心を成していたティフリスではメンシェヴィキが、油田によりかなり繁栄していた工業の中心であるバクーでは鉱業労働者や港湾労働者の間でポリシェヴィキが巣をつくっていた。社会民主党はティフリスとバクーにいつものように司令部を開設したが、同党のこれら2つの敵対する分派は革命運動に対して影響力を及ぼすべくカフカースの人民大衆を掌握しようと尽力していた。

周知のように、この2つの分派を互いに衝突させた主要な主題とは、有名な戦術問題であった。メンシェヴィキは、体制に抗して政治的な手段で闘って帝政を倒し替わりに共和政を樹立することを支持しており、社会主義の諸原理が社会の構成に影響を及ぼすことを

求めてはいたが、現存する資本主義の諸条件の下で社会構造が暴力や革命によらずに漸進的發展の諸原則により発展させられることを推奨していた。このため、彼らは、ブルジョア階級の[うちの]帝政体制に反対している自由主義的かつ急進的な諸集団との政治な連携を組むことが必要だとみていた。革命政党として策謀や地下活動に従事してはいたものの、この分派のメンバーたちは状況が好転した際には法的な規定を活用することが必要だと考えていた。このため、彼らは労働組合に浸透して、これらをして労働者階級の真の利益を擁護することに第1の重要性を付与するよう励ましていた。革命政党として渦中にあつた地下活動下においてさえ、メンシェヴィキは、民主主義の諸原則の尊重を必要だとみており、組織内の諸委員会の下部から上部へと進む民主的な選出のヒエラルキーに決定的な重要性を与えていた。

しかしながら、ポリシェヴィキはこれとは正反対の戦術を用いた。まず第1に、これらの人びとはブルジョア諸政党とのいかなる種類の連携にも反対した。政治体制としての帝政体制とともに、彼らは、経済体制としての資本主義をも打倒する決意であった。労働組合を労働者の経済的利益を擁護する以上に、これらを体制に抗して常に反対し闘争する革命組織として使った。党それ自体の内なる組織機構については、下部から上部へ進む民主的な機構ではなく、上部から下部へ向かう革命的な機構を推進していた。《革命的少数派》支配と集中制がポリシェヴィキ党の不変のスローガンであった。

当時の状況におけるバクー

アゼルバイジャン共和国の首都を成すバクーは、当時の状況にあっては、単にロシア国内の社会主義の諸潮流やツァーリに反対する様々な運動の煮えたぎる温床であったばかりではなく、同時にカフカースに居住しているムスリムたち特にアゼルバイジャン・トルコ人たちの民族運動にとっても中心的役割を果たした都市であった。

アゼルバイジャンの民族的活動のあらゆる種類の政治的・社会的・経済的ならびに文化

的な諸運動に影響を及ぼしていた中心的な諸機関は、たいていこの地にあった。バクーの産業のうち油田で働いている労働者の大きな部分と中等教育機関で学んでいる青年層の重要な部分を、アゼルバイジャン・トルコ人が構成していた。こうしたわけで、この地で活動していた広汎な革命的かつ反体制的な諸潮流の傍らには [これらの潮流から] 距離を置いて運動に従事していた地元の民族的なグループや組織もあった。その中には、私が組織したものであって、そのメンバーたちがロシアの様々なリセその他の中等教育機関で学んでいるアゼルバイジャン・トルコ人の学生たちから構成される、秘密のサークルがあった。このサークルは、メンバーの民族的な感情を鼓舞すること、ロシア語学校では教えられていない [アゼルバイジャン・] トルコ語 [の能力] を互いに向上させること、地元の文学者の作品を読むこと、帝政を批判して書かれた革命詩を暗誦したり時には印刷されたマニフェストを頒布すること、労働者たちの中に入って自由と革命の思想をこうした人びとの間で体系的に広めること、といった活動をしていた。サークルには、謄写版で発行される《ヒュンメト (精励) 》という名を冠した雑誌があった。⁽¹¹⁾

社会ととりわけ青年層の内にみられるあらゆる種類の人づきあいや集団形成を自らの勢力下に収めようと張り合っていたポリシェヴィキやメンシェヴィキの抜け目のない教宣活動家たちは、当然ながら、我々のサークルにも浸透しており、どうかして我々を自分の側に引き入れることを望んでいた。ポリシェヴィキ派はティフリスに比べてバクーでいっそう勢力があった。

上述のこの我々のサークルに浸透しつつあった教宣活動家たちからか、わたしが別の状況で出会った帝政反対派の数人の人からか、バクーのポリシェヴィキ派を統轄しているコバという名の精力的な人がいることを耳にしたことがあった。

スターリンとの最初の接触

バクー石油産業労働者組合という名を持つ組織があった。専ら労働者の経済的利益にの

み関心を示していたこの公的な組織のヴェールの下では、秘密裏に政治的な活動も行なわれていた。帝政に反対して非合法の活動をしていた民族組織のメンバーのうち、私の従兄弟 [父方のおじの息子] メヘンメド・アリは、上述の組合で書記の仕事をしていた。ある日、彼が、コバが我々に会いたがっていると知らせてきた。^{*}

バクー近郊のバラハヌ油田地区にある工場労働者向け専用住宅のひとつのごく簡素な部屋で、我々の前にやせて弱々しく並みより少しばかり背の高い男が現れた。⁽¹²⁾ わたしが質素な身なりをしたこの人物のあばたで凸凹になった顔⁽¹³⁾に注意を向けると、彼はまじめそうに微笑んだ。[その男は] 我々を自然で率直な態度で出迎えた。グルジア訛りが強く感じられるロシア語で話していた。ありきたりの挨拶がすむと、話は政治や社会の問題にうつった。

疑いなく、会談は当時の最も差し迫った問題に関するものになろうとした。当時の社会主義者たち、一般にマルクス主義者たち、特にポリシェヴィキたちの中では、とりわけ労働者階級と殊にプロレタリアを理想化することが流行であった。コバは、プロレタリア階級が他の諸階級と比べて歴史的に卓越した階級であることを滔々と述べ、「世界における不公正の根本的な原因は [私的] 所有制度という土台に依拠した資本主義体制にあるのである」といった。「世界を真に幸福にしようと望む真の自由と正義の支持者たちは」彼によれば、「この体制を根底から打倒せねばならない。諸民族と勤労人民をその暴虐と専制の下に置く帝政はこの体制に基盤を置いている。帝政の根をすっかり断つには、この所有制度が打倒されねばならない。このような深甚な革命に対しては、所有関係のないプロレタリア階級のみにも備えがある。なぜならば、プロレタリア階級はいかなるものも所有しておらず、その所有物は自分の両手と頭だけであるからだ。革命の問題においてはプロレタリアの誠意のみが信頼できる。」マルクス主義者たちの有名な選ばれた階級の理論に適合させられたこの定式を、スターリンは、さらに実際に遭遇した明白な例を以て描写した。「私は」と彼はいった、「あるグループの労働者たちと

文化的要求の実現を求めつつも、第1次世界大戦においては「ムスリム市民」にロシア政府への支持を呼びかけた。Alexandre Bennigsen et Chantal Lemercier-Quelquejay, *La presse et le mouvement national chez les musulmans de Russie avant 1920*, Paris: Mouton & Co., 1964, p. 119; Tadeusz Swietochowski, *Russian Azerbaijan, 1905-1920: The Shaping of National Identity in a Muslim Community*, Cambridge: Cambridge University Press, 1985, p. 82; Audrey L. Altstadt, *The Azerbaijani Turks: Power and Identity under Russian Rule*, Stanford: Hoover Institution Press, 1992, p. 77.

(4)《イーラーネ・ノウ》紙は1909年8月24日に創刊された、イランにおける立憲革命(1905~1911年)の「小専制(1908年6月~1909年7月)」後の時期を代表するペルシア語の日刊紙。同紙は、タギーザーデらが指導する当時の有力党派のひとつデモクラート党寄りの論調でかねてより知られていたが、1910年10月以降は名実ともにデモクラート党の機関紙となった。ラスルザーデは、創刊当初から1911年5月にロシア公使館の圧力でイランから追放されるまで同紙の実質的な編集者と主筆をつとめ、《ニーシュ》等の筆名で健筆をふるった。同紙は自由主義を擁護し、社会改革に関する論陣を張るとともに、イランに初めてマルクス主義の要諦を紹介したと評されている。Edward G. Browne, *The Press and Poetry of Modern Persia*, Los Angeles: Kalimat Press, 1983 (Original ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1914), pp. 52-53; Ervand Abrahamian, *Iran Between Two Revolutions*, Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 103-104; Janet Afary, *The Iranian Constitutional Revolution, 1906-1911: Grassroots Democracy, Social Democracy, and the Origins of Feminism*, New York: Columbia University Press, 1996, p. 273 ff.

(5)《イエニ・カフカスヤ(新カフカス)》誌、《アゼリー・テュルクユ(アゼルバイジャン・

トルコ人)》誌、《オドル・ユルドゥ(火の国)》誌などの存在が知られている。Vilayet Muhtaroglu, "Azerbaycan XX. yy Türk Edebiyatı (1920'ye kadar)," *Türkiye Dışındaki Türk Edebiyatları Antolojisi 4: Azerbaycan Türk Edebiyatı IV*, Ankara: Kültür Bakanlığı, 1993, s. 302.

(6)ヒュンメト党もしくはその前身を指すものと思われる。

(7)この大会(1917年5月1日~11日)におけるロシア領内のムスリム諸民族の自治と国家の形態をめぐる論争において、アゼルバイジャンの代表ラスルザーデは民族ごとの領土的自治をともなった連邦制を主張し、オセッソ人メンシェヴィキのアフメド・ツァリコフらと対立した。ツァリコフはヴォルガ・タタール人ブルジョアジー(サドリ・マクスドフ[サドリ・マクスディ・アルサル]など)や社会主義者、汎イスラーム主義者らの立場を代弁してロシア帝国の行政機構を維持した上での文化的自治を支持する論を張った。一方、バシコルト人のアフメド・ゼキ・ヴァリドフ[アフメト・ゼキ・ヴェリディ・トガン]やクリミア・タタール人らは連邦制導入に同調する姿勢を見せた。大会では、446票対271票で連邦主義者の提案が採択された。この大会の模様とその意義については、Serge A. Zenkovsky, *Pan-Turkism and Islam in Russia*, Cambridge: Harvard University Press, 1967, pp. 142-153; Richard Pipes, *The Formation of the Soviet Union: Communism and Nationalism 1917-1923 (revised ed.)*, Cambridge: Harvard University Press, 1964(1954), pp. 76-78; Swietochowski, *Russian Azerbaijan*, pp. 90-92; 山内昌之『スルタンガリエフの夢 - イスラム世界とロシア革命』東京大学出版会、1986年、118~128頁を参照のこと。

(8)《プロメテウス》協会は、1926年5月のクーデタで実権を握ったユゼフ・ピウスツキの下で将来のソ連との戦争を視野に入れたポーランド政府(特に参謀本部と外務省)の肝いり(活動資金の援助など)により発足した団体で、ソ連地域出身の少数民族の亡命者から構成されていた。その中にはグルジアや

ウクライナの代表も含まれてはいたが、ラスルザーデをはじめカザン・タタール人のアヤズ・イスハキやトルキスタン出身のムスタファ・チョカイオウルらトルコ系諸民族の代表が多数含まれていた。同協会はパリ・ベルリン・ワルシャワなどヨーロッパ各地で各々の民族語でソ連地域の民族解放を訴える雑誌などを発行していた。月刊誌《プロメテウス》は一連の雑誌の代表的なもので1926年11月～1938年4月にパリで発行され、カフカースとウクライナ（のちにはトルキスタンも）の諸民族の利害を代弁する役割を果たした。戦間期および第2次世界大戦中のラスルザーデのヨーロッパ各地での活動は、主としてこれらの人脈を足がかりにしたものと思われる。Charles Warren Hostler, *Turkism and the Soviets: The Turks of the World and their Political Objectives*, New York: Frederick A. Praeger Inc., 1957, pp. 157-160; Jacob M. Landau, *Pan-Turkism: From Irredentism to Cooperation*, Bloomington: Indiana University Press, 1995, p. 81.

(9) 日露戦争はロシア旧暦（ユリウス暦）でも1904～05年の出来事であること、日本海海戦やポーツマス条約調印がいずれも1905年のことであること等から、本文中の「1903年」は「1905年」の誤植であると思われる。なお、本文の日本海海戦と旅順陥落は順序が逆である。

(10) ロシア社会民主労働党はブリュッセル（途中からロンドン）で行なわれた第2回大会（1903年7～8月）で、党規約第1条の党員資格に関する規定をめぐる対立がきっかけで分裂した。レーニンは党を職業革命家のみから構成される中央集権的な地下組織としての前衛党とすることを提案した。他方、マルトフらは「組織」のメンバーの他にそのシンパをも含むより大きな党を提唱した。なお、スターリンは1902年4月から1903年11月までの間カフカースの獄中にあり、さらにシベリアに流刑となったが、のちに脱走してカフカースに戻り、1904年末までにはレーニンを支持する姿勢をとった。第2回大会の経緯と意義については、Edward Hallett Carr, *The Bolshevik Revolution 1917-*

1923, vol. 1, New York: W. W. Norton & Company, 1985 (Original ed. 1950), pp.26-44 (E・H・カー『ポリシェヴィキ革命 1917-1923 第1巻』原田三郎・田中菊次・服部文男訳、みすず書房、1967年、28～43頁) Deutscher, *Stalin*, pp.67-76. (ドイッチャー『スターリン』[第1巻]50～57頁。)を参照。

(11) 《ヒュンメト》の結成については、ロシア社会民主労働党の影響下に結成されたものか否かについて論争があるが、西側諸国の研究では、従来、以下のようにいわれてきた。1903年に、アゼルバイジャン人の青年知識人のグループがディベートのサークルを結成し、翌年からムスリムの民衆への働きかけを開始した。このグループは、1904年10月に創刊された機関誌の名称に倣って《ヒュンメト》と称した。最初期のメンバーはラスルザーデら他の組織には加わっていない知識人と、スルタン・マジド・エフェンディエフらロシア社会民主労働党員とから構成されていたという。初期の機関紙の論調は、帝政の官僚機構やそれに協力的なムスリムの宗教界を批判し、アゼルバイジャン文化を軽んじる西洋的な知識人やブルジョワジーを非難するなど、非マルクス主義の立場からのものであった。1905年初めにはマシュハディ・アズィズベイオグル・アズィズベコフやナリマン・ナジャフオグル・ナリマノフといった社会民主労働党員が更に加わった。以上より、《ヒュンメト》は最初期においてはロシア社会民主労働党員でもあるメンバーを介して、ロシア社会民主労働党と提携関係にあった程度ではなかったかとみなされてきた。Swietochowski, *Russian Azerbaijan*, pp. 51-52; Mangol Bayat, *Iran & First Revolution: Shiism and the Constitutional Revolution 1905-1909*, Oxford: Oxford University Press, 1991, pp. 86-87.

(12) スターリンは、ティフリスおよびグルジアでのメンシェヴィキに対するポリシェヴィキの劣勢を挽回すべく、同志のアルメニア人ポリシェヴィキ、ステパン・シャウミヤン(1878-1918)とともに1907年6月にバクーに活動の拠点を移した。シャウミヤンは最も古い油田地帯であり石油労働者組合の本部があったバラハヌ地区に定住し、ス

ターリン自身はノーベル油田のあるピビ - エイバト地区に落ちついた。当時のバクーの労働者の間では主にロシア人の熟練工から構成されるメンシェヴィキ系の機械工組合とムスリムの未熟練工らを対象として立ち上げられたポリシェヴィキ系の石油労働者組合が対抗関係にあり、社会民主党バクー委員会はメンシェヴィキが掌握していた。バクーの労働者のおよそ4分の1ずつがロシア人とアルメニア人から成り、およそ半分がムスリムであった。以後、ポリシェヴィキは、まず、バラハヌ地区やピビ - エイバト地区の社会民主党地区委員会を勢力下におさめ、同時にムスリムを含む労働者層の組織化と一層の浸透をはかるなどして、メンシェヴィキを圧倒すべく活動を展開していく。スターリンがバクーに拠

点を据えて活動していた時期は1907 ~ 1910年であるが、失敗に終わりはしたものの、既に1906年の時点で彼自身が社会民主党に合流するようヒュンメトに働きかけていたとも伝えられる。Ronald Grigor Suny, "A Journeyman for the Revolution: Stalin and the Labour Movement in Baku, June 1907-May 1908," *Soviet Studies*, Vol. 23, no. 3, 1971, pp. 373-376, 381-385; Swietochowski, *Russian Azerbaijan*, p. 54.

(13) スターリンは6つか7つの頃に天然痘を患ったため、顔にあばたが残っていたという。Deutscher, *Stalin*, p. 22. (ドイツチャー『スターリン』[第1巻]12頁。)

